

説教 『暗闇と、消えることない灯』山本 護 牧師
聖書 創世記 49：8～12／ルカによる福音書 22：47～53

イエスを裏切る十二使徒ユダの祖先は、十二部族中の筆頭であった。「ユダよ、あなたは兄弟たちにたたえられる(創世 49:8)。王笏はユダから離れず、統治の杖は足の間から離れない(49:10)」。イスラエル他部族のトーテムが「骨太のろば(49:14)」や「蛇(49:17)」、「雌鹿(49:21)」や「かみ裂く狼(49:27)」であるのに対して、ユダは「獅子の子(49:9)」である。裏切りは栄光なる部族の裔によって為される。

扇動された群衆(ルカ 22:47)、祭司長や神殿守衛長、長老たち(22:52)にイエスが捕らえられたのは、まことに暗い夜であった。大祭司(22:50)や権威権力のすべてがイエスを殺害したかった。「わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている(22:53)」とイエスは言った。闇は十字架に時至るとさらに広がり、世界全体を覆うことになる(23:44)。こんな漆黒の闇にあつて、イエスはどうふるまっただろうか。

闇の先頭にはイスカリオテのユダがいた。福音書は「ユダが十二人の一人(23:44)」教会の源流、使徒であることを強調し、私たちは自らのこととして聞く。イエスは「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか(22:48)」と語りかけた。「接吻」は信頼と親愛の徴であり、それをもって裏切りが実行される。まさしくサタンらしい手口だ(22:3)。悪は凶暴なだけでなく、親愛の姿によっても働く。

イエスの語りかけによって、その場に重苦しい沈黙が生じたと想像できる(22:49)。これは非難ではない。闇の中にあつてもなおイエスは、ユダに悔い改めを求めているのではないか。重苦しさはユダの混乱ではないのか(マタイ 27:3~4)。にらみ合った緊張に耐えられず、弟子の誰かがイエスを守ろうと剣を取り(ルカ 22:49)、「大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした(22:50)」。この自衛行動に対して、イエスは「[やめなさい。もうそれでよい]と言い、その耳に触れていやされた(22:51)」。

大祭司の策謀、神殿当局者の憎悪、扇動された群衆の殺気。そしてそれらの先頭に行くはめに陥った使徒ユダ。こうした闇の力が猛威をふるうただ中においてイエスは、傷ついた闇の手下を癒された。裏切られてもユダを愛し、最後まで闇から光に立ち返ることを求めた。闇は敵も味方も丸呑みし、世を覆っていく(23:44)。だが強大な闇が押しつぶそうとしても、イエスの灯を消すことはできない。

キリストの愛の本質は、暗い闇にあつてくっきり描き出される。昼、目が見える時には明るい希望の教えがあつた(21:37~38)。だが真の救いは、日中の市街地や神殿境内など、多くの耳目が集まる所ではなく、夜の闇の中、寂しいオリーブ山の麓(22:39)で啓かれていく。逮捕されるそのさなかに敵を癒し、裏切り者を赦そうとされたイエス。もはや神の御心を教えるだけではない。言葉や奇跡によって御心を現出させるだけにとどまらず、死に赴くことで根本的な赦しを実現しようとしている。

闇に覆われる敵と味方は、十字架を境に大きく転換することになる。だがそれは神の予定調和ではない。イエスという人間の死に寄り添う神の、のっぴきならない試みによるものなのだ。使徒の役割を受け継ぐ教会の、罪と分かちがたい救いは、闇に呑み込まれない小さな灯によって実現する。



【おまけのひとこと】

奇蹟によって解き放たれ 奇蹟という型に押し込められるごとく 救いの言葉は 抑圧の言葉にも 真理と偽善 サタンはどちら側にも顔をだす 騒々しい声々の中 何よりも小さい声に耳を傾けよ